

疲我儘から、再び顔を上げようとしたが、頭がぐら／＼としてまた突つ伏した。さうしてもうできるだけ早く、陸の方へ歸りたいと思つた。そのとき彼はなぜ、冬子嬢と一緒に陸に止まらなかつたかと思つた。

人々は心配して、舟を返すことになつた。小野はもう舟の中に寝たきり、只管陸に漕ぎつづくの待ち兼ねた。

舟が着いて、陸に上つたとき、小野は眞蒼な顔をしてゐた。そしてやうやく宿へ歸りつくと、階下の空いてゐる間に、床を取つて貰つて横にならなければならなかつた。

併し、さういふ半病人の状態であるながら、彼は冬子嬢の介抱に来てくれるのを、期待するやうな心持がないではなかつた。

が、冬子嬢は何處かへ行つてゐて、すぐ心配して来てくれはしなかつた。そして、夕方になつてから、鳥渡小野の寝てゐる部屋へ、半ば閉つた障子の外から顔を出して、

「どうして？」と覗き込んだだけだつた。

「もう大分気分も癒りました。——お入んなさい。」

小野は幾らか元氣づいて、待つてゐたやうにさう云つてみた。

「厭。——」
彼女の答は簡單だつた。

「どうして？」

「だつて、叔母さんがゐらつしやるから、貴方の傍に行くのは厭なの。」
さう云つて彼女は、向うへ行つて了つた。そしてそれつきり、小野の寝てゐる所へは顔も見せなかつた。

つた。

小野の舟酔は、やがてすぐ癒つたけれど、冬子嬢の冷淡さは、小野が歸京するときまで、どうしても癒らなかつた。小野は失敗に終つたこの葉山行を顧みて、何となく満たされぬ心を抱きながら、翌日一人淋しく東京へ歸つて行つた。

小野が、冬子嬢と自分との間に、隙があるやうに感じたのは、そのときが初めてだつた。けれども彼は、彼女の心を、決してまだ疑はなかつた。そしてそのときの冷淡さを飽くまで、彼女の言葉通り、叔母に對する羞恥から、強ひて執つた態度だとのみ信じた。

その夏は、華やかだつた春の後を受けて、小野にとつては物足りない夏だつた。

第十四章

秋は來た。季節の秋と共に、小野には何となく自分たちの戀愛關係にも、冷やかなものが忍び込んできたやうに、感ぜられてならなかつた。が併し、それはごく僅かな、ほんの肌觸りにも過ぎぬ位のもので、彼が持前の敏感から、又戀するものゝ本能から、さう無意識に感じたに過ぎなかつた。けれども、それは全然形のないものではなかつた。

勝見の一家が、避暑地から引上げると、それからすつと杉浦は榎町の宅に泊つてゐることになつた。が、小野はそれを杉浦の生活の安定のために、心から喜びこそすれ、決して羨みもしなかつた。

彼はすつかり杉浦を信じ、夫人を信じ、冬子嬢を疑はなかつた。そして杉浦のやうな勝見家に近しい地位は、それ以上のものをやがて自分も占むべきものであり、又さうなる迄のツナギとして、自分の幸福を彼に頼ち與へてゐるやうな氣さへしてゐた。小野は杉浦に、何の不安をも感じてゐなかつた。寧ろ杉浦が何時行つても、勝見家にゐて呉れることは、小野自身にとつても好都合に違ひないと思つてゐた。彼は杉浦を、敵としてわざ／＼その故郷から呼び寄せたのではなかつた。自分の味方として、安んじて勝見家へ置いたのだつた。

けれども實際は、日を経るに従つて、それらの形勢が少しづつ變つて來るのを、小野も感じない譯にはゆかなかつた。

冬子嬢は小野が訪れれば、毎も變らぬ笑顔で迎へて呉れた。小野を遇する態度に、別に變つたところがある譯ではなかつた。が、それは小野に對しては、少しも變つてゐないだけで、一緒にゐる杉浦に對しては前よりもすつと親しみが深くなつてきたのは、止むを得ないことであつた。

小野が一家の人々と、勿論杉浦をも交へて、何か談笑してゐるとき、杉浦は冬子嬢や夫人と共に、小野には通じないことを云つて、笑ひ出すことなども聞々あつた、それは、小野のゐないときに、勝見の一家中で起つたことで、それが彼等だけの通り言葉になつてをり、それを使ふことに依つて、彼等一團は一種の樂しみを覺える、例へば、かういふことだつた。

「……それはまるでカントの時計だね。」

何かの拍子に、杉浦がそんなことを云ひ出して、夫人や冬子嬢を顧み、共に笑ひ出したのだつた。小野にはまるで、その意味があつて分らない言葉を、仕方なしに連れ笑ひだけしながら、訊き糺さなければならなかつた。

聞いて見るとそれは、その前日に起つたことで、新太郎少年が曉星學校で、先生からカントといふ偉い獨逸の哲學者が、キチンといつも正確に時間を守つて、規則正しい生活をしてゐたといふ訓話を聞いてきて、自分も是から時間をキチンと守りたいが、それには第一時間を見るべき懐中時計が無くては駄目だから、一つ買つて欲しいと云ひ出したのだつた。そのいかにもやんちゃで剛巧な少年らしい理窟には、チャンと條理が立つてゐるので、夫人初め家庭教師の杉浦も困つた。と言つて、すぐ眞もの懐中時計などを、十歳かそこいらの子供に買つて與へることは、贅澤でもあり、賤の上から言つてもできない。止むなく杉浦が、得意の逆説を用ひて、カントは懐中時計をもつてゐたから、時間を正確に守り得たのではなくて、時間を正確に守る位の人だつたから、懐中時計などは要らなかつた。と、無理遣に説服してしまつたとの話だつた。そしてそれ以來、何か子供らしい理窟に出會ふと、『カントの時計』と云ひ、またそれを逆にうまく説き伏せて了ふことを、『カントの時計』といふ通語で評するのだつた。……

さういふ風な場合に出會つたとき、小野は必然的に何となく、彼等の親しさを見せられ、自分が除外されてゐるやうな、淡い感じを抱かない譯にはいかなかつた。

そればかりでなく、冬子嬢は、確かに小野よりも杉浦と話してゐる場合の方が、より以上に親しい自由な冗談口を、交してゐるやうに思はれた。それは一つには、杉浦が小野のやうに冬子嬢に對して、愛慕の念に囚はれ過ぎてゐる譯でもないで、遠慮なく自由に、どんな冗談でも云へるに違ひなかつた。しかしその親しさは小野にとつて、半は矢つ張り無關心ではゐられなかつた。小野はあるとき冬子嬢に向つて、冗談らしい非難と嫉妬を以て、かう云つたことがあつた。

「冬子さん。貴女は僕よりか杉浦と話してゐるときの方が、餘つ程愉快さうに笑つたり喋つたりして

ゐますね。」

「さう？」と、彼女は首を傾けて、それから辯解するやうに云つた。

「だつて何だか貴方とは、氣づまりといふんでもないんですけれど、巫山戯たりできないのよ。けれど、杉浦さんだと、何でもありませんもの。」

さう云はれると、愚かにも小野は、寧ろ自分の方が彼女から立てられてゐるやうに思つて、満足しなればならなかつた。

そのうへ、小野は夫人の恩寵が、やうやく自分から移つて、杉浦の方へ傾いてきたのを、漠然と意識せざるを得なかつた。

それらはしかし、是と云つてまだ事實に現れる程ではなかつた。たゞ漠然と、敏感な小野に、さう感ぜられたに過ぎなかつた。そして事實は、決してさう悪化してゐる譯でもなかつた。外形上から云へば、冬子嬢も小野に、變らぬ好意を表白してゐた。或時は、三越か何處かへ行つた、土産だと云つて、陶器製の小さい西洋人形を送つて來たりした。それは茶色のボール箱に、綿を着せて入れられたまふ、大切に小野の机の中に秘藏された。そしてときどき彼はそれを取出しては、一人で机の隅に立て、眺めた。髪のところを亞麻色に塗り、青い眼をぱつちり見開き、ぼつと赤過ぎる位赤く頬を染めた人形は、決してその送り主を直接聯想させるやうには出來てゐなかつたが、小野は一人寂しいときなどに、それを出して飽かず眺め入つた。時にはその稍肌理の細かくない陶器を、沁々と頬に押當て、冷たく甘いやうな感觸を楽しんだりさへもした。

が、しかし、それから數日經つて、勝見家へ行つたとき、何氣なく杉浦の机の上を見ると、それと同じ人形が、彼の持物の中へ交つてゐるのを見て、小野は非常に不快な氣がした。嫉妬とか何とかの

氣持よりも、何だか敷かれたやうな氣さへした。

で、それつきり彼は、再びその人形を机の抽斗から、そつと取出して煙擦りするやうな愚は、繰返すまいと決心した。が、またしかし戀するものゝ弱味で、彼女が自分に人形を送る必要上、杉浦にも送らなければならぬと考へて、序に申譯に杉浦へも送つたのかも知れない。と、さう思つて自ら慰めたが、それでも何となく小野の氣持は、すつかり晴やかにはならなかつた。

無心の西洋人形は、綿に包まれたまゝ、小野の机の抽斗の隅に、暫く日の目を見ないでゐた。……

二

さういふ状態であるところへ、その頃、札幌の農事試験場の技師をしてゐる小野の兄が、公用を兼ねて上京して來た。

小野は、一體に自分の一身上のことは、なるべく自分の手で始末をつけたいと思つてゐた上に、自分の戀愛問題などは、どうも生靴かしいやうな氣がして、是迄別に兄に打開けたこともなかつたが、今度の問題は、ひよつとすると自分が勝見家へ入つて、たとへ苗字は變へないまでも、謂はゞ入婿のやうな關係にならなくてはならないかも知れないので、一應簡單に事實だけを述べて、兄に相談旁々報告だけはしておいた。それで兄としては、この際公用と共に、小野の様子を幾らか見たい心持で、上京して來たのに違ひなかつた。

小野の方でもまた、兄に幾らか事情も知らせ、また事に依つては勝見夫人や冬子嬢に、一應紹介して置きたい希望がないではなかつた。

それで、小野は夫人と冬子嬢と、三人で上野の院展を見た歸りに、機を見て夫人に言つてみた。

「ねえ奥さん。今度近々の中に、北海道の兄貴が、僕のところへ来ると云つてきてゐるんですがねえ。一つ會つてやつてくださる譯にはゆきませぬまいか。兄貴も私がお宅から、いろ／＼御世話になつてゐるのを知つてゐるもんですから、お目に懸つて一言御禮を云ひたいつて云つてきてゐますから。……」

「さうですか、それやアいつでもお目にかかりますよ。」

夫人は早速承諾して呉れた。

「有難うございます。それなら兄貴がやつて来ましたら、何かさういふ機会を作りますから、是非一度會つてやつて下さい。丁度今月末には、帝劇にいゝ活動寫眞があるさうですから、何なら御一緒に、それを見物するやうにでもして下さると、僕の方は大變都合がいゝんですがね。」

「さうね。家へいらして下さるのより、そんなことの方がいゝわね。」

「いづれ参りましてから、さういふ手筈にいたしますから、どうぞお願い申します。それに、何なら冬子さんも是非、御一緒にいゝで願へればこの上ないんですがね。」

小野は少し強請がましいやうで身が引けたが、さう思ひ切つて願つた。

「ええ、ようござんすとも、外に差支さへなければ。ねえ、冬子。」

夫人は思ひの外に、是もまたすぐに承諾して、冬子嬢を顧みた。

「ええ、何だか小野さんの兄さんなんて、恥かしくて厭ですけれど、お母さまがいゝことになるんなら……」

そんなことで、冬子嬢も兎に角、承諾だけはして呉れた。

「ぢやア、いづれさういふ手筈にして、その時にお知らせいたしますから。」

小野も喜んで、それだけ承諾を得れば大丈夫だと思つて、その日の来るのを待つた。

やがて兄は、上京して小野の下宿に着いた。そして汚い素人下宿ではあつたが、氣心の知れない宿屋なんぞにゐるより、よつぽど居心地がいゝからといふので、暫くその儘滞在することになつた。兄弟は晝間は、兄は公用でいろ／＼の役所や會社などに出向き、弟はまだ例の私立中學に教へに出て、顔を合せることはなかつたが、夕方からは一緒にゐつて、久しぶりで東京の食物を食つたり、また色々な劇場や觀覽物を見廻つたりすることになつた。

小野は矢つ張り、兄と冬子嬢たちを會はせる場所を、帝國劇場の活動寫眞と決めた。それは第一、もう本興行が終つてゐたからでもあつたが、また勝見家の子供たちも一緒に來得る必要上、活動寫眞なら都合がよかつた。小野は夫人と冬子嬢とに來て貰へばそれでよかつた。が、それでは妙に事が改まり過ぎるので、勝見家の兄弟たちも一緒に來て、それとなく只兄に會つて貰ふ方が、自然で都合もいゝので、勝見家の子供たちの爲にも、そこを選んだのだつた。

彼はその前に、兄にもかう云つておいた。

「兄さん、明日はね。帝劇で今度封切をする、活動寫眞を見に行かう。あの勝見家の人たちも、一緒に來る約束になつてゐるから。」

「さうか。ぢやア問題の人にもお目にかゝれる譯だな。」兄は開けつ放しな、蟠まりのない態度で、すぐに云つた。「そいつは願つてもない好機會だが、あんな兄貴ぢやア、なんて、輕蔑されると困るな。」

「大丈夫だよ、そんなこと。そんな人たちぢやアないから。」

小野は笑つて答へた。

勝見家へは、その前日鳥渡行つて、夫人にも改めて承諾を得ておいた。

「……奥さん。それぢやア今度の土曜日に、お子さん方を引連れて、帝劇へいらして下さいませぬ」

か。僕たちも行きますから。」
 と、何かの序に、それと明白に兄と會はせるとは云はなかつたが、先日の承諾もあり、もう解つてゐることと思つて、確に言つた積りだつた。

「え、行きませう。他に差支が無かつたら。」

小野はそれで安心して、ひたすらその日の来るのを待つてゐたのだつた。

その日、小野は定刻の近づくのを待ち兼ねて、兄を促すやうに、下宿を出た。兄は、初めて有名な勝見家の人たちに會ふといふので、いつもより丁寧に髪へ櫛を入れ、新しいネクタイを旅行鞆の中から取出して、一生懸命に形よく結んだ。そして二人は毎もと違つた期待で、帝國劇場へ向つた。

向うへ着いた時は、まだ開演までに鳥渡間があつた。小野は女給に導かれて、定めぬ席へ就くと、帽子を椅子の下へ入れるなりに、周囲の一等席を見渡した。ひよつとするともう勝見家の人たちは、先に來てゐるやしないかと思つて、けれども、ずつと一巡見廻したところ、まだそれらしい群は、どこにも來てゐる様子はなかつた。

——彼等は小野たちと一緒に、並んで席を取らずに、却つて各々離れ離れに取つて、幕間のやうなときに、會はうと思つてゐたのだつた。即ち勝見家の人たちは、小野たちと別に、切符を買つて入るやうに手筈を決めてあつたのだつた。

それで小野は、席へ就いてからも、絶えず兩側の出入口を注意して、今來るか今來るかと思つて、彼女等の入場するのを待ち構へてゐた。

時間は刻々經つて、さう入りがあるといふ程でもないが、入場者はだん／＼増えてきた。が、彼女らはなかく姿を見せなかつた。小野はもう殆ど目を放さず、出入口の方ばかり見てゐたけれど、それと紛らふやうな人々も入つて來なかつた。彼は兄の手前、さうそは／＼することもできず、席には

腰を下してゐたが、心はひたすら入つてくる人の物色にのみ奪はれてゐた。

その中に、たうとう開演時間は來た。そして場内は薄暗くなつた。それで止むなく小野は、出入口の方を見るのを斷念して、正面の白い掛布に映る、實寫物か何かを、無意味に見入つてゐる外なかつた。そしてとき／＼機を見ては、それとなく振り返つて、まだ出入口の方を窺つてゐた。そして兄が何か映畫に就て、一二言話しかけるのにも抄々しい返事ができなかつた。

が、しかし、その間に、この實寫物が終つて、場内が明るくなる頃には、彼女たちも來てゐるだらう。そんな風に考へて、彼はぢつと待つてゐた。

けれどもその寫眞が終つて、一時にはつと場内に灯の點いたのを待つて、小野は周囲を見廻したけれど、矢つ張りそこらの一等席には、誰もそれらしい人は來てゐなかつた。彼は階下をずつと見終ると、二階の方も丹念に、一巡ぐるりと見渡したけれど、其方には極僅かな人数が散在してゐるだけで、矢つ張り彼女たちの姿に似たものも見えなかつた。

さうしてゐる中に、又前へ挿んだ喜劇が始まつた。小野は又その映寫中には、遅くとも彼女等が入場して來るに違ひないと思つて、心待ちに濟むのを待つた。そして傍の兄が、腹のあたりに、聲を立てて、笑ふのを聞き流しながら、泣きたいやうな心持で、可笑しい畫面に眺め入つてゐた。

それが濟むと、大急ぎで又彼は向うを見渡した。が、まだ彼女等の姿は見えなかつた。彼は念のため、殆ど一々數へるやうに、平土間にゐる人々を、ずつと眺め盡した。そして伸び上つて二階をも眺め盡した。

「まだ來ないのかね。」

さすがに兄も、小野がさう後をふり返つて見てゐると、期待を共にするやうな顔を見せて、さう言

か。僕たちも行きますから。」
 と、何かの序に、それと明白に兄と會はせるとは云はなかつたが、先日の承諾もあり、もう解つてゐることと思つて、確に言つた積りだつた。

「え、行きませう。他に差支が無かつたら。」

小野はそれで安心して、ひたすらその日の来るのを待つてゐたのだつた。

その日、小野は定刻の近づくのを待ち兼ねて、兄を促すやうに、下宿を出た。兄は、初めて有名な勝見家の人たちに會ふといふので、いつもより丁寧に髪へ櫛を入れ、新しいネクタイを旅行鞆の中から取出して、一生懸命に形よく結んだ。そして二人は毎もと違つた期待で、帝國劇場へ向つた。

向うへ着いた時は、まだ開演までに鳥渡間があつた。小野は女給に導かれて、定めぬ席へ就くと、帽子を椅子の下へ入れるなりに、周囲の一等席を見渡した。ひよつとするともう勝見家の人たちは、先に來てゐるやしないかと思つて、けれども、ずつと一巡見廻したところ、まだそれらしい群は、どこにも來てゐる様子はなかつた。

——彼等は小野たちと一緒に、並んで席を取らずに、却つて各々離れ離れに取つて、幕間のやうなときに、會はうと思つてゐたのだつた。即ち勝見家の人たちは、小野たちと別に、切符を買つて入るやうに手筈を決めてあつたのだつた。

それで小野は、席へ就いてからも、絶えず兩側の出入口を注意して、今來るか今來るかと思つて、彼女等の入場するのを待ち構へてゐた。

時間は刻々經つて、さう入りがあるといふ程でもないが、入場者はだん／＼増えてきた。が、彼女らはなかく姿を見せなかつた。小野はもう殆ど目を放さず、出入口の方ばかり見てゐたけれど、それと紛らふやうな人々も入つて來なかつた。彼は兄の手前、さうそは／＼することもできず、席には

腰を下してゐたが、心はひたすら入つてくる人の物色にのみ奪はれてゐた。

その中に、たうとう開演時間は來た。そして場内は薄暗くなつた。それで止むなく小野は、出入口の方を見るのを斷念して、正面の白い掛布に映る、實寫物か何かを、無意味に見入つてゐる外なかつた。そしてとき／＼機を見ては、それとなく振り返つて、まだ出入口の方を窺つてゐた。そして兄が何か映畫に就て、一二言話しかけるのにも抄々しい返事ができなかつた。

が、しかし、その間に、この實寫物が終つて、場内が明るくなる頃には、彼女たちも來てゐるだらう。そんな風に考へて、彼はぢつと待つてゐた。

けれどもその寫眞が終つて、一時にはつと場内に灯の點いたのを待つて、小野は周囲を見廻したけれど、矢つ張りそこらの一等席には、誰もそれらしい人は來てゐなかつた。彼は階下をずつと見終ると、二階の方も丹念に、一巡ぐるりと見渡したけれど、其方には極僅かな人数が散在してゐるだけで、矢つ張り彼女たちの姿に似たものも見えなかつた。

さうしてゐる中に、又前へ挿んだ喜劇が始まつた。小野は又その映寫中には、遅くとも彼女等が入場して來るに違ひないと思つて、心待ちに濟むのを待つた。そして傍の兄が、腹のあたりに、聲を立てて、笑ふのを聞き流しながら、泣きたいやうな心持で、可笑しい畫面に眺め入つてゐた。

それが濟むと、大急ぎで又彼は向うを見渡した。が、まだ彼女等の姿は見えなかつた。彼は念のため、殆ど一々數へるやうに、平土間にゐる人々を、ずつと眺め盡した。そして伸び上つて二階をも眺め盡した。

「まだ來ないのかね。」

さすがに兄も、小野がさう後をふり返つて見てゐると、期待を共にするやうな顔を見せて、さう言

つた。

「え、もう大抵来る時分なだけけれど、……きつとお終ひの封切物に、間に合へばい、と思つてゆつくりしてゐるのかも知れない。その中にはきつと来るでせう。」

そしてそれが終つた時、又小野は立ち上つて、その間に入つて来たであらう人々を、席の後に探した。が、もう殆ど、入場する人もなくなつたと見えて、観客席には、別に新しい人々の入つた様子もなく、たゞ劇場関係の者らしい人々が、一等席の後の方に、ちらほら腰をかけてゐるだけだつた。それでも、小野は又一階中を見廻し、一階をふり仰いだ。二等へ来てゐる譯はないと思つたが、萬一と思つて二等の方までずつと見探つた。そしてそれだけで足りなくて、たうとう、

「兄さん、僕、鳥渡見てきます。」

と云ひ捨てると、急いで席をがたと立つて、出入口から廊下の方へ出た。そして念の爲と思つて、廊下の方から二等席を、一々精細に調べた後、二階へ上つて同じく檢めた。

廊下を一巡したが、勿論廊下にもゐなかつた。時計を見ると開演時から、もう二時間近くも経つてゐた。

『どうしたのだらう?』

小野は泣きたいやうな、兄の手前恥かしいやうな、恨めしいやうな思ひを籠めて、正面の出入口から、もうすつかり暮れ切つた場外のお濠に沿うた青い街路を眺めやつた。が、もうそこへ車を寄せる観客も、切符を買ひに来る人も無かつた。

ふと、彼は廊下の隅の、自働電話を認めて、一應問ひ糺す氣になつた。そして急いで駆け入つて、

電話で勝見家の番號を交換手に通じた。が、なか／＼出て来なかつた。その中にやつと通じた。

「あ、もし、勝見さんですか、僕、小野ですが、奥さんはまだお宅にゐらっしゃいますか。僕は今帝劇にゐるんですが、……」

「鳥渡お待ちください。」

出て来たのは御飯焚きの女中らしかつた。

と、代つて出て来たのは、杉浦だつた。

「あ、もし、小野かい。」

「うむ、杉浦か。僕はいま帝劇へ来て、待つてゐるんだがね。奥さんたちはもうお宅を出たかい。」

と、杉浦の冷嘲を含んだやうな言葉が、受話器の向うで響いた。

「あ、さうか。それはお氣の毒さまだがね。奥さんは今日は頭が痛いとかで、まだお家におゐるよ。今日はいらつしやらないだらう。」

「さうかい。ぢやア冬子さんたちもゐるんだね。僕はまた、今日はこゝでお目にかゝるつもりで、今迄待つてゐただけだねえ。餘り遅いんで電話をかけて見たんだ。さうかい。……ふうむ。そいつは残念だな。」

小野はさうは云つたが、心の中では、何だかくわつと恨めしい思ひが込み上げて来るのを、どうにも禁することができなかつた。

「さうか。そいつはお氣の毒さま。」毎もの癖で、冷かすやうに杉浦は猶も云つた。「だが、一緒に活動を見ようなんて、さう甘くはゆかないさ。まア偶には、一人でぼんやり見物するのもしらう。」

それは杉浦の、毎日の毒口には違ひなかつたが、場合が場合だけに、小野にはカンと悪意を帯びて響いた。小野は殆ど杉浦に對して、憤怒に近い氣持を覺えざるを得なかつた。が、彼は聲を沈めて云つた。

「兎に角、それぢやア奥さんに、僕が兄貴と一緒に、お待ちしてゐたと傳へてくれ。」

さう言つて、がちやりと彼は電話を切つた。そして何かを叩きつけたやうな憤怒と、泣きたい程な怨恨を抱いて、額を白ませながら、再び席へ歸つて來た。

「どうだつた。」

兄もさすがに待ち兼ねてゐて、さう訊ねた。

「いま電話をかけてみたら、奥さんが何だか頭が痛いとかで、今日は來られないと云ふんだ。……残念だけれど。……」

小野は申譯のやうに、何となく兄に恥かしいやうな、腋の下に冷汗する思ひで、さう答へた。

「さうか。」兄はすぐ小野の、顔色を幾らか見て取つたらしかつた。「そんなら、またお目にかゝる機会もあるだらう。いゝま。今日は却つて來ない方が。——僕もさうこんな所で、お目にかゝりたくもなかつただから。……」

と、兄はそんなことを云つた。が、さう云はれれば云はれる程、小野は返す言葉もなく、助からない氣持に陥つて行つた。

彼はその夜、殆ど活動寫眞などとは見てゐなかつた。彼の眼はたゞ白い眼前の幕に、ちかく動く映像を無意味に眺めてゐるだけで、夫人や冬子嬢に對する怨恨や、杉浦に對する憤慨や、兄に對する恥辱やで、胸が一ばいだつた。就中杉浦の悪意ある——と小野は思はざるを得なかつた。——冷嘲に對し

ては、一時は胸も煮える程怒みと憤りを抱いた。……

……と、翌日、小野の語氣が、電話を通じて夫人たちに傳はつたものか、冬子嬢から小野に宛て、一通の詫手紙が届いて來た。

それはその前夜、帝劇へ來なかつた晩に、彼女が認めたものらしく、かう記されてあつた。

小野さん。

昨日は失禮しました。毎もと違つて、あんまり早くお歸りになつたので、なんだか淋しいやうな、詰らないやうな氣がいたしました。

今夜小野さんは帝劇にお出でになつたんでございますつてネ。お一人でございますの。御兄さまも御一緒にいらつしやいますの。

私お約束しておきながら參らないなんて、本當に御免遊ばせ。秀子さんも定子さんも、そんなに好きになささうでしたし、それにお母様が少し頭がおいたくて寝ておいでになつたものでございまして、私一人で行くわけにも參りませんでしたので、大變失禮なことをいたしました。どうぞ〳〵御許し下さいます。

けれど本當にあなたにお氣の毒でお氣の毒でたまりません。ですからいらつしやる前に、もう一度お電話をお掛け下さるやうにお願ひいたしましたのに。

でも又今度御一緒に參ればよろしうございますわネ。——まだ〳〵これから行く間は澤山ございませぬもの。……

この聞きました齋木善作といふ人の手紙また參りました。が、やつぱり私でなくて定子さんの間違

ひでございしました。それなので杉浦さんが、又からかつて「先の手紙で姉の冬子が、大變喜んでりますから、どうか姉の方で我慢なさつてくださるやうに。」つて云つてやるつて、大笑ひをいたしました。

「お手紙を上げない」と申しましたが、悪いことをいたしましたから、お詫までにはさし上げます。字が下手でござお読みにくいでございますが、どうぞ我慢遊ばして下さいませ。

九月××日夜
小野辰夫様みもとに
冬子より

この手紙は小野にとつては意外だつた。そして繰返し「読んで、少し媚びられてゐるやうにも感じたが、『まだ是から行く間は澤山ございますもの。』」などといふ文言には、自ら嬉しい微笑を禁じ得なかつた。併し、かうして小野の心は、この手紙に依つて辛うじて慰められたが、まさ心は平かでないか。そして却つてこの手紙で、油を注がれたやうな心持で、一應彼は冬子嬢に對して、その時の恨みを述べずにはゐられなかつた。彼はすぐに手紙を書いた。

それには、彼女からの訃手紙を貰つて、今ではもう何とも思つてはゐないが、一時大いに夫人や冬子嬢を恨んだこと。そして同行の兄に對しても、何となく面目を失つたこと。さういふことを先づ書いて、胸の中なる思ひを、晴らすにはをられなかつた。

それに次いで、彼はその時杉浦が、電話口でつた態度に對して、更に憤慨を述べずにはゐられなかつた。あの際彼の云つた冷笑的な言葉は、假りにも友達の間で困惑した場合に、發せらるべきものでないのみか、冬子嬢と小野との間に風をいれて、喜ばうとするかの如き惡意をさへ感ずる、といふやう

なことを小野は書いた。書いてゐる中に、杉浦に對する彼の憤慨は、平素漠然と持つてゐた嫉妬、彼女が杉浦に親しくする傾向のあることまで、言及せずにはゐられなかつた。彼は人形のこと書いた。而して最後に、さういふ嫉妬を杉浦に感ずる位、自分の愛は切なるものだと書いた。

それを書いて了ふと、彼は胸中の思ひをすつかり打開けたやうに、心が軽くなるのを感じた。そして早速それを投函した。

どんな反響が冬子嬢からあるか、と、それを恐ろしいやうな、楽しいやうな期待を以て、彼は一日を過ごした。と、突然今度は醫子夫人からの來狀に接した。

その後お目にかゝつたら、お話ししようと思つてゐたのですが、手紙で申上げます。この間の帝劇の事ですが、あの時はいろいろ用事やら、お客やら、頭の痛いのやら、又子供の都合もまもらず、お約束を違へて失禮いたしました。然し小野さん、貴方にも落度はありますよ。私は小野さんお一人のことで、それはお見さんをお連れになるといふことは聞いてゐましたが、冬子への手紙へ書いておよこしになつたやうな、わざ／＼私たちに會はせたいといふお考へとは少しも氣が付きませんでしたから、子供は都合が悪いのいゝのと愚圖々々いふし、それに自分の氣分も悪しするから、お約束だとは云つても他の人ではなし、貴方と私のことですから、失禮だけれどやめにしたのです。それでも何だか氣が濟まないから、冬子によく手紙で譯を話して上げるやうにいひつけて置いたのです。その御返事を見て驚きました。さういふお積りなら何故そのやうに、確と私に仰しやらないのです。さういふ事情でお目にかゝる約束をしたのなら、子供など連れずとも私一人で参ります。

又私が行けなければ、冬子だけでもやります。貴方の方では私たちが来るものと思つて、お兄さんには私に逢はせるやうにお話しになつたのでせう。かういふことは外のこと、違ひ、曖昧の話では事が間違ひますよ。第一私がお兄さんに對して、人を馬鹿にした失禮なものになり、貴方も信用がなくなる譯ではありませんか。尤もこの間上野の歸りに、兄さんに逢つて呉れないかとのお話もありましたが、確かな御返事はいたさなかつた積りです。兎に角、貴方にも理窟はあるでせうけれど、そのことに就いては落度もありませんよ。

小野 辰夫様

馨子

その手紙は、申譯のためのものであつたが、併しその文面の裏には、夫人が少し小野に對して、立腹してゐるらしい様子が、それとなく現はれてゐた。――反響は、幾分豫期しないではなかつたが、小野にとつて意外に不安な方面から來た。それでなくても夫人からは、殆ど理由も分らずに、少しも機嫌を損じられてゐる際だつたので、彼には殊更不安だつた。

で、その翌日、小野は申譯旁々、勝負家へ遊びに行つた。もうあんなことに關しては、何とも思つてゐないから、冬子嬢を通じて、恨みを述べたりしたことは、許して呉れと云はうと思つて、訪れたのだつた。

と、夫人は留守だつた。その日の午前中に、頭の工合が悪いからと云つて、その療治旁々、鹽原へ紅葉見に行つたとの話だつた。留守には冬子嬢も杉浦も残つてゐた。杉浦は小野に會ふと、二人になるのを待つて、こんなことを云ひ出した。

「君の冬子さんに宛てた手紙を見たよ。そして不快だつた。」
 「さうか。けれどもあの時の僕は、君に對して全く正直のところ、あゝ感じたもんだから、率直に書いて了つたんだ。君の口物が餘り癪に障つたんでね。だが、もうあんなに思つてゐる譯ではない。君の本心さへ解りさへすれば、あんなことは全く一時の感情だ。あれにも書いて置いた通り、冬子さんに對する情熱の餘り、あんなことを言つて了つたんだ。それで君を不快にしたとすれやア、僕が悪かつた。詫るよ。」

「併し、兎も角。」と、杉浦はその頃短く刈つた坊主頭を、厭にちやんと伸ばし立て、云つた。「僕はあれを讀んでから、君たちに對する態度を決定したよ。僕はこれ迄及ばずながら、君たちの味方になつていろ／＼と同情して來た積りだ。が、これからは、もう絶対に無關心でゐようと。――敵にもならないし、その代り味方にもならない。それだけはつきり云つて置くよ。」

さう宣言されては、小野もどうにも仕方がなかつた。殊に、この頃の地位のいゝのを利用して、厭に高壓的に出られては、少しの反感もむら／＼と起きて、かう云ひ返さずにはゐられなかつた。

「さうか。君があれだけのことで、さう思ふのなら仕方がない。いづれ僕のあの時の氣持が、君にも分る時がくるだらうから、これ以上の辯解はしないよ。」

「兎に角僕は、君たちに對する態度が、さし當りさう定つたことだけ云つて置けばそれでいゝんだ。それだけの話なんだ。」

反響は益々意外な方向へ、擴がつて行くのを小野は感じた。そして不安にも思つたが、仕方がないとも思つてゐた。

一週間ばかりして、夫人も鹽原から歸つて來たが、小野が輕くいろ／＼な申譯をしたのに對して、

言葉少なに答へたきり、どうしても機嫌は直らなかつた。

さうした形勢の中にあつて、小野はまた一と波瀾を起すやうな事件を、ふと起して了つた。といふのは、前に冬子嬢からの手紙に、書いてあつた齋木善作といふ男と、冬子嬢——といふより事實は冬子嬢——に關する出来事を骨子にして、彼が「一挿話」といふ小説を作り、それを雑誌「新聲」に發表したことだつた。

その齋木善作といふのは、定子嬢が勝見家から目白までの、通學筋に當るある町の、藥屋の主人だつた。そして毎日店の前を通る、定子嬢の姿を見て、それに憧憬を感じたと見え、遂にそれが勝見家の令嬢だと解ると、ある日わざ／＼手紙を以て、結婚を申入れたのだつた。

その手紙が、勝見家に届いたのは、小野も杉浦も座にゐて、いろ／＼談笑してゐるときだつた。

「お母様、今どこからだかこんな手紙が來てよ。」

冬子嬢がそれをもつて來た。夫人がそれを受取つて見ると、四角い粗末な洋式封筒の表には、勝見新太郎様と當主の名が記してあつた。そしてその裏には何の署名もしてなかつた。夫人は何氣なしに封を切つた。すると中からは一枚の名刺と、半紙一枚へ亂暴に字を走らせた書状が出てきた。夫人はすぐそれを押し開いて、ずつと文面に目を通したが、それから怪訝な顔に微笑を浮べて、かう皆の前へ手紙を擴げて見せた。

「鳥渡、これは何でせう。こんなことを云つて來たのよ。」

皆は異常な興味を以て、その文面を覗き込んだ。手紙にはかうあつた。

さうして名刺の方には、「神人合一論者。牛込區早稲田御卷町××番地、正顯閣、齋木善作」としてあつた。

皆は一度その亂暴な字體を推讀して、大體の意味を捕捉すると共に、顔を見合せて噴出して了つた。さうして改めて封筒の裏表や、名刺の活字などを注意して見た。が、それらは單に誰か悪戯の爲にそんなことをしたとは、どうしても思へない眞實さが現れてゐた。

「妙なことを云つてくる人があるものね。一體正氣なんでせうか。」

夫人は暫くしてかう云つた。

「ちやんと番地入の名刺まで入れてきてゐるのを見ると、滿更唯の悪戯とも見えませんね。」

杉浦が言つた。

「一體こんなことで、すぐ娘一人をやる氣になると思つてゐるんでせうか。正氣にしても少し可笑しうわね。」

「だから、調査に應ずるから、いつでも調べに來てくれと云ふんでせう。案外大した金持の息子か何か、小野も笑ひながら、口を挟まずにはゐられなかつた。」

「どうです奥さん。差支がなかつたら、一つ冬子さんをお遣しになつちやア。」
杉浦はまた例に依つて、得意の揶揄を始めた。

「全く冬子さんには、却つてその方が幸福かも知れませんか。神人合一論者で、自ら財産や身分の調査に應じうる位自信があるんだから、僕たちのやうな輕薄才子とは、自ら選を異にしてゐるかも知れませんからね。」

小野も皮肉を籠めて、そんな冗談を云つた。

「さうね。」夫人もそれに應じた。「この人でも確かに貴方がたよりは上等らしいわね。」
「どうです冬子さん。」杉浦は猶も、揶揄の鋒先を轉じて續けた。「お差支がないこととして、一つ齋木夫人におんななさい。マダム。サイキ。語呂から云つても、なか／＼いぢやありませんか。」

「知らないわ。」冬子嬢も苦笑してゐたが、揶揄を受けると眞顔になつて云つた。「他人のことだと思つて。——惡戯でも何でも、氣味が悪いぢやないの。ねえ母様。どんなことされるか分らないから、すぐ何とか斷りの返事を出して頂戴よ。」

「なに、放つてお置きよ。こんな手紙へ正直な返事をやる必要があるものかね。馬鹿々々しい。」
「全くさうですな。相手にしない方がいゝですな。」

そんなことで、最初の手紙は、笑ひ話の中に葬られて了つた。
が、それからまた四五日過ぎると、第二本目の督促状が来た。それには矢張り半紙一ぱいに、この間は手紙を差上げた筈だけれど、未だに返事のないのはどうした譯だとか、餘り率直だつたのでお怒りかも知れないが、どうか自分の衷情を察して、是非乞を容れてくれとか、さうしたことが再び記されてあつた。そして今度は細々と、自分の身分がその中に述べられてあつた。

それに依ると、齋木なる男は、新潟縣の生れで、年は三十四歳であり、家にはちやんとした妻子があるが、その妻にはちやんといひ聞かせてあるので、冬子嬢さへ来てくれると定れば、いつでも別れることになつてゐるといふのだつた。そして自分は、今でこそ片手間に藥劑師をしてゐるけれど、やがてはそれをやめて了つて、自分の本領たる神人合一論といふ一種の宗教を樹立し、いまの混沌たる思想界の迷夢から、人類を濟ふのが目的だ。そしてそれにはいまの妻ではいけない。もつと立派な教養のある冬子嬢のやうな人を、内助者として必要だ。その冬子嬢とは毎日通學の毎に、顔を見るので知つてゐるが、いかにも自分の理想の妻たるに相應しい。

さういふことが、半紙數枚に亘つて、亂暴な大きな文字で、しかも神來を以てしたやうな自由奔放な行文を用ひ、俗語を引用したり、格言を拈んだり、また行と行との間へ割註を入れたりして、實に奇妙な手紙を形作つてゐた。そしてその行と行との間へ更に細かく書き入れをするのは、物に熱して精神が昂揚した際、自分のよくする癖であつて、誠に讀み悪いかも知れぬが、自分の平生を知つてゐる人には、却つて直接の精神的接觸を感じさせるのだから、その積りで讀んで欲しいとまで書いてあつた。

それを讀んで、勝見家の人々は呆れた。と同時に、その最後の文句に依つて、彼が現に通學中の冬子嬢と家にゐる冬子嬢とを、取り違へてゐるのを知つた。その妙な男に、見初められたのは冬子嬢だつた。冬子嬢と冬子嬢とはさう歳も違はず、また身體の大きさも殆ど變りない位だつた。それで齋木某が、冬子嬢のことを勝見家の令嬢と聞くと、一も二もなく長女の冬子嬢だと思つて、そんな求婚状を寄越したに違ひなかつた。一體冬子嬢は、目鼻立の派手な、ぱつと目に立つ美人だつた。それで彼女はよく、早稻田の學生や何か後につけられたり、また手紙をつけられたりした。中には大膽に電

話で呼出した者さへあつた。だから齋木某なるものが、さうした考へを起したのも、定子嬢なら無理もないと思はれた。どちらかといへば目立たぬ、大人しい冬子嬢が、そんな見知らぬ男から求婚を受けるといふことは、初めから可怪しかつた。——そのことが、冬子嬢から小野に宛てた手紙に書き記されてゐたのだつた。

しかし兎に角勝見家にとつては、定子嬢にもせよ冬子嬢にもせよ、そんなことを言つて来る男があつては、不安を感じざるを得なかつた。狂人だからとばかり相手にしないでおくと、いつどんなことをされるか解らない懸念もあつた。それで、一つ警察へでも頼んで、巡査に説諭でもして貰ふか、警戒して貰ふより外はないといふことになつた。けれどもまた、事が事だけに、内分で済むなら済ましたかつた。それで夫人と杉浦と小野とが、いろ／＼相談の結果、兎も角もあつして、齋木某の方では自分の調査にも應じると云つてゐるんだから、一應向うへ訪ねて本人にも會つた上、よく此方の事情を話し、きつぱりそんなことはしないでくれと斷つた上、それでも肯きさうもなかつたら、そのときこそ警察の力を藉りるなり何なりして、處置をつけた方がいゝといふことになつた。

そしてその談判には、小野と杉浦とが、一緒に行くことになつた。秋のある晴れた日の午後、彼等は殆ど面白半分、鶴巻町といふから散歩がてら、その正顯閣を訪れるために出かけた。

途中、小野は何となく不安な心の中で、いろ／＼な場合を想像した。彼はまづその男を、場所柄早稲田大學を中途でよした位の、毛色の變つた哲學者か何かのやうに想像した。そしてそれが實は隠れたる天才であつて、顔なども病的な畸形美を備へ、炯々たる眼光を放つ男で、行つて見ると彼の書架には、東西古今の哲學書が満ちてをり、その中で彼は孜孜として神人合一論の著述に没頭してゐる。

……そんな風に想像さへした。そしてその想像は馬鹿げてゐるが、いづれにもせよ齋木といふ人は、きつと説服し難い奇人には違ひないと思はざるを得なかつた。

小野と杉浦とは鶴巻町の通りへ出ると、その車夫溜で番地の所在を尋ねた。

「××番地の正顯閣と。……聞いたことがあるやうですが、鳥渡思ひ出せませんが、けれども××番地ならこゝから二町ほど行つた、少し大きな横町から先ですから、その邊へ行つて訊いて御覽なさい。」
車夫はかう云つて教へてくれた。

小野は何だか敵地に臨んだときのやうな、一種の不安を心臓のあたりに覺えた。そして正顯閣なるものゝ存在が遂に不明で、齋木なんて男はゐないでくれ、ばい、と、ふと思つたりした。が、杉浦は先に立つて、どん／＼その方向へ歩いて行つた。

車夫の云つたやうに、二町はかり行くと、成程左側にそれらしい横町があつた。

「こゝだらう。」
小野はかう云つて立止つた。

「うむ、こゝらだらう。」

杉浦も繰返した。そして二人は、改めて四邊を見廻した。と、そのとき二人の眼は同時に、向う側の横町の角にある、小さい藥舗の中に吸ひつけられた。

「あれだらうか。」

杉浦は自ら聲を潜めて云つた。

「あれかも知れない。そつと調べて見よう。」

小野も唾を呑むやうにして答へた。

そこで二人はさりげなくその前を通り過ぎて、薬舗の名を調べることにした。二人はできるだけゆつくり歩いて、その看板を横目に眺んだ。すると黒い中に金で抜いた中將湯の看板や、屋上に掲げた亜鉛張りの店名に、正しく正頼閣、齋木薬舗の数字を認めた。杉浦は小さな聲で、「此處だ。」と云つた。小野はそつと點頭いた。

よく見ると店頭には、もう四十を越したかと思える、頭の禿げかゝつた一人の男が、無精髻に顔の半を埋めて、勘定臺に肘を凭せたまゝ、ぼんやり何か考へながら、坐つてゐるのが見えた。二人は少し行き過ぎて立止つた。

「あれだらうか。」

杉浦は、もうくつくと笑ひながら、しかしまた聲を潜めて云つた。

「あれだらうかね。」

小野も、あれがさうだとすれば、その餘りに意外な男なのに、疑ひを抱かざるを得なかつた。

「けれども確かに看板にも、齋木といふ名は出てゐるし、あの軒の名札にも、確かに齋木善作と書いてあつたからね。あれだとすると滑稽だね。彼奴が店先にあゝしてゐて、定子さんを見初めたんだとすると、實に可笑しいね。」

「さうだね。あれだとすると、僕はもう今更談判する勇氣も挫けて了つたよ。けれど、ひよつとすると善作といふ男は、あの二階を借りてゐる別な人も知れないから、まア兎に角入つて行つて、話だけはつけて来よう。」

二人は一種の勇氣を振り起して、その店頭へ敢然と入つて行つた。小野はさすがに氣後れがしたが、杉浦は遠慮なく真直にそこへ立塞がつた。物思ひに沈んでゐたらしい店の主人は、二人の足音に

惰げな顔をぢつと上げた。彼は二人を普通の客と思つたらしかつた。

「私たちは勝負家から参つたものですが、齋木善作さんと仰しやるのは貴方ですか。」

杉浦は會釋もなくはつきり云つた。

男の顔には一瞬間、非常な狼狽が見えた。そして悪い顔色が一層蒼ざめた。それから疑懼するやうな、哀願するやうな眼付を、ちらと二人に走らせて、上つた聲でかう云つた。

「あ、さうですか。私が齋木です。ではどうぞ二階へお上りください。」

小野と杉浦は、顔を見合せて點頭き合つた。それから下駄を脱いで上つた。そして彼の導くまゝに、店先から梯子段のある茶の間を通つた時、二人はそこに何か縫物をしてゐる、二十三四の細君らしい若い女を認めた。打見たところ、それは可愛らしい家婦であつた。二人はその齋木君が、冬子嬢さへ来てくれれば、いつでも別れるといふ細君らしい女を見て、互に微笑を以て點頭き合つた。

二人はぎし／＼いふ梯子段を踏んで、兎も角も二階へ上つた。新開地らしい粗末な建て方であるが、新しいので割に綺麗だつた。窓の外に突出し縁には、二三鉢の草花などが置かれてあつた。主人は二人を導き上げておいて、また急いで下へおりた。小野はひよつとすると彼が、何か兇器でも取りにおりたのではないかとさへ思つたが、あの人の好ささうな四十男に、迎もんそなごとのできる譯はないと思ひ返して、室の中を眺め廻してゐた。主人はやがて下から、客用のらしい座布団を持つて上つて来た。二人は改めてその上に坐り直した。

と、杉浦がまづ嚴然とした口調で口を切つた。

「では早速ながら用件を申し上げます。私たちは實は、度々貴方から勝負家の方へ手紙を頂きましたので、その御返事参つたものですが、貴方の仰しやる勝負家のお嬢さんは、もう外に定つたところ

がございますんで、折角ですが御求婚には應じ兼ねますから、以後決してあんなお手紙などはくたさ
らぬやうに、呉々も申傳へてくれと言はれて参りました。」

「はい、それは……」
主人は自ら下を向いて、何か言ひかけようとしたが、杉浦は猶も押つ截せるやうに、更に厳然と
言ひ續けた。

「で、貴方が細君を御離別なさらうと、なさるまいとは御勝手ですが、勝負家の方ではあんなことを
云つて来られると、甚だ迷惑しますから、どうか勝負家の令嬢に對しては、決して何もなさらぬやう
にして頂きたい。それだけのことをお話に参りました。」
かう杉浦は云つて了ふと、見下すやうに肩を反らした。

「はい。よく解りました。」主人は豫想外に早く聽從して、大人しく、吃りながら云つた。「貴方がた
がいらしてくだすつたので、もうすぐ何も仰しやらなくとも、私の方では思ひ切りました。」と、更に
口調を改めて訴へるやうに、「かういふことは、どなたにもあることでして、貴方がたも少しは察し
て下さいませうが、私もいろ／＼考へましてな。どうも今の妻が性に合はぬものですから、是非御令
嬢をお貰ひしたいと思つたんでしたが、お二方がわざ／＼おいで下すつたんで、もうよく解りまし
た。只どうかよく仰しやつて下さい。私のやりましたことは、私としてはよく考へた後にやりました
ので、世の中の不良少年のやり方とは、結果に於いて同じでも、考へは違ふのでございますから、ど
うか是からもその點だけは、決して御心配なさらんやうに。」

「さうですか。さう申しませう。」
杉浦は眉根一つ動かさずに、冷然と答へた。彼はさうした場合、いつも手強い態度を持してをられ

る性分だつた。小野は何となく氣の毒なやうな、妙な同情を以て黙つてゐる外なかつた。

主人は續けて云つた。

「妻のことも、あゝ申し上げましたが、まだ歸さずに置きましたから、御心配下さらないやうに。――
あの、只今下ををりましたのが、あれが妻です。妻も決して悪い女ではないのですが、どうも私と性
格が合ひませんので、私は今こそ薬局などをしてをりますが、是からは思想方面の著述をしようと思
つてゐるものですから、妻によつて性格の傷つけられるのを何より恐れました。自分の進む道の
爲には、どうしても今の妻と別れて、新しい生活をしなければならんと思つたのです。」

「はあ。それは御勝手ですが、思想上の著述とやらが、さう今迄の生活を犠牲にする程、價値のある
ものでせうかな。」

杉浦は猶も冷然として、そんな手強い皮肉を云つてゐた。

「只今、私の著述の一斑を、御参考までにお目にかけてませう。さうすれば私の意のあるところも、幾
らかお分りになりませうから。」

と、齋木氏はかう云ひながら、傍の押入れの中から一つの支那靴を取出した。そしてその雜然と反
古めいたものゝ入つた底から、一綴りの原稿を引出した。

「打見たところ、それは三百枚もあらうかと思はれる、半紙に大きく墨で書いた、――あの手紙と同
じやうな、――老大なものだつた。彼はそれを輕蔑と妙な興味とで、黙つて眺めてゐる二人の前で、
二三十枚ざつと繰つて見せた。そしてところ／＼の要點を大聲で讀んで聞かせた。それは理路の立つ
てゐないといふ程ではなかつたが、ひどく國士的な漢文口調の論文だつた。

「……まア是が、私の著述なんでして、この清書した奴は、只今活版所に廻してあります。前に一部

分を印刷したのもありましたが、皆それは私の知友やら、全國の圖書館、神道に關係した人々、思想上の先輩などに送つて了ひましたので、こゝにさういふ人たちの受取りがございませう。これがその大隈さん。それからそれが犬養さん。これが杉浦重剛さん。マアさつとこんな具合でして、これらはいづれも始終私の交際してゐる人々なんです。――要するに私の論旨といたしますところは、人間の中に神格といふものを認めまして、それに依つて神壁――神の壁ですな。――神壁の中へ入れば、人間は即ち神と成りうるといふ議論でして、この書の中にも十分に論じ盡してはをりませんが、いづれは生涯の事業として完成する積りでをります。一體私がかういふことを始めました動機は、若い時に大變身體が弱うございましてな。北海道から樺太をかけて遊び廻つたことがございまして。その時に漠然とかういふことを悟つたのでしたが、その後長くも明治天皇の御尊格や、乃木將軍の御性格などをよく調べますにつれて、いよく自分の考が間違つてゐないのを知りましたので、先づ家にゐた書生やら妻などによく話して聞かせましたところが、さういふ貴い考なら、是非何かに書き残して置いたらいふだらうといふので、妻などに勧められたのが抑もの動機でした。」

「さういふ結構な奥さんぢやありませんか、いはゞ貴方の御著述の産婆でせう。」

杉浦は又さういふやうなことを混ぜつ返した。

「それもさうですが、どうも性格が合ひませんでな。私は性格が傷つけられるのを何より恐れてゐるのですから。」

齋木氏はもう一度かう云つた。彼は性格を傷つけられるといふ言葉が、非常に得意らしかつた。

「もうお暇しようぢやないか。」

小野はもう馬鹿々々しいやら、何だか氣の毒なやうな氣持やらで、杉浦を促した。

「歸らう。」

杉浦も應じた。

「さうですか、どうもわざ／＼おいで下すつて恐縮でした。ではどうぞお歸りになつたら、勝負さんの方にも宜しく申上げて下さい。決して御心配なさらぬやうに、以後は決して何も申上げませんから。或ひは年始状ぐらゐ差上げるかも知れませんが。……」

小野はその言葉に、思はず微笑んだ。が、杉浦は、

「承知しました。」

と、相變らず端然と答へた。

すると齋木氏は聲を低めて更に云ひ出した。

「え、承知しました。」

小野は杉浦と顔を見合せながら、快活にさう答へて立上がつた。

歸る時も細君は、何も知らない愛想笑ひをしながら、二人を送つて出た。小野はその細君に對して妙に氣の毒なやうな、滑稽なやうな感じがして、正視するに堪へなかつた。

二人は普通の客のやうに、普通に挨拶して戸外へ出た。そして暫く道を行つて、もう齋木藥舖から聞えない位遠ざかると、それまで堪へてゐた愛に悲喜劇な感じから、思はずふつと噴出してしまつた。

二人はもう誰に憚ることもなく、街中で聲を立て、笑つた。……

その事件を小野は、雑誌「新聲」記者から寄稿を頼まれた時、他に適當な材料が無かつたのと、少しはその自分の心持を述べたい氣持のために、さう深い考もなく、筆にしたのだつた。そしてその女主人公を、事實は定子嬢の間違ひだつたに係らず、どこまでも冬子嬢自身のことにして、しかもその主人公なる「私」といふ男を、その令嬢の許婚として描いた。その許婚なる「私」が、その不思議なる求婚者に對して、抱く感想を描いたのでつた。

四

その小説が「新聲」に發表されると、その翌日のことだつた。小野は突然勝見夫人から、一通の速達便を受取つた。急いで封を切つて見ると、それには、たゞ簡單にかう書いてあつた。

少しお話したいことがありますから、明日午後三時頃そちらへお訪ねします。どうかよそへ行かずに待つてゐて下さい。

小野 辰夫 様

啓

それを讀むと小野は、さすがに不安な胸臆きを、その厭に簡單な文言から、どきりとする程激しく受けた。彼はあの小説を書いたものゝ、さすがに勝見家で起つたことを材料としたことだけに、幾らか氣が咎めてゐた。別に勝見家の人たちに、迷惑をかけるやうな悪いことは、少しも書いた積りはな

かつたが、それでも一家の私事を材料としたことには、何となく濟まないやうな氣がしないではなかつたのだ。

そこへ夫人からその手紙だつたので、彼は、「あ、矢つ張りさうだつたか。」と、大體の事態はすでに推察した。夫人は怒りに來るに違ひなかつた。——向うから、わざ／＼出向いて來ると云ふからには、よほど怒つて、何か言ひに來るのだ。——さう思ふと彼は、何だかゝるも立つてもゐられないやうな、不安な思ひに閉されざるを得なかつた。どんな風に夫人は怒つてゐるだらう。怒つて、どんなことを云ふだらう。そしてその結果、自分と勝見家との關係は、どんな風になるだらう。……併し小野も、さすがに少しは覺悟を決めた。自分のやつたことは、もうやつたことで仕方がない。自分は決して悪意でやつたのでも、また爲にしようと思つてやつたのでもない。だからそれが夫人からどんな怒りを貰はうと、それは仕方がないことだ。まア明日夫人が來て、どんな風なことになるかそれは成行に任せる外はない。……と。

が、併し、さうは覺悟を決めても、不安は矢つ張り不安だつた。殊にその翌日、夫人の來る迄待つ間の不安と焦燥は、殆んどどつとしてゐられない程だつた。

もう冬になりはじめの、薄い赤ちやけた日の光が、傾きかけて下宿の二階の縁にさしこんでゐた。そしてそれが妙に頼りない影を、障子の襷に映してゐた。三時といへば、もう暮れ早な街には、何となく物悲しい雑音が流れて、それが小野のぢつと待つてゐる心を、更に不安と焦燥とに陥れた。彼は幾度か中腰になつて、狭い硝子の簾つた障子の腰から、今夫人が下宿の前の狭い路次を、はひつて來るか／＼と待つた。

たちとう夫人の黒い姿が、其處へゆくり入つて來た。小野はやつと吻をした思ひと、更に激し

い内心の不安とに襲はれざるを得なかつた。

下宿の婆さんの、「勝負さんの奥さんがいらつしやいました。」といふ案内を待つか待たずに、急いで梯子段をおりて行つて、

「どうぞ。……どうぞお入り下さい。」

と云つた小野の言葉は、妙に乾からびたやうな顔へを帯びてゐた。夫人は、例に依つてむつと黙つたまゝ、従容として二階へ通つた。

「わざ／＼よくいらして下さいました。汚い布團ですがどうぞ此方へ。」

「え。」

夫人は下の婆さんが、茶器を持つて来て勧め去るまで、殆ど口敷をきかずに、其處へどつしりと坐つてゐた。小野は又その無言の態度から、更に不安と畏怖とを興へられた。

婆さんがおりてしまふのを待つて、夫人はその結んだやうな口を切つた。

「小野さん、今日私がお話に來た用といふのはね。外でもありませんけれど、あの貴方が『新聲』に出した小説ね。あれは一體、何？」

夫人の言葉は、もう考へて來たかのやうに、初めから鋭かつた。

小野は矢つ張りさうだつたかと思ひながら、首を垂れてかう答へる外なかつた。

「あゝ、あれですか。あれは別に何の氣もなしに、書いて出してつたんですが、何か悪いことでもあつたんですか。もしさうでしたら。……」

夫人は皆まで云はせず、押つ蔽せるやうに聲を勵まして云つた。

「何か悪いことどころぢやありませんよ。貴方は一體あんなことを書いて、それでいゝと思つてゐる

んですか。第一、貴方はまるで自家の冬子と、もう正式に婚約ができてるやうに書いて、それで差支ないと思つてゐるんですか。——貴方はきつとあゝ書いて、廣く世間に發表してしまへば、先輩たちも黙つてしまふし、自家でもまたどうでも貴方との結婚を、承知しなければならぬと思つて、さう仕向けたくせう。」

夫人にかう曇みかけて、激しく云ひ出されると、小野は殆どおど／＼して、どう云ひ解いていゝか分からぬ程だつたが、さうまで云はれては、さすがに彼も、顔を上げて答へない譯にはゆかなかつた。

「いえ、決してそんなことはありません。そんな政策的な積りで、僕があれを書いたなんて、それは餘りといへば餘りな奥さんの誤解です。僕はたゞ、……それやア冥々の中に、さういふ氣持は働いてゐたかも知れませんが、書く時は只あゝした方が、主人公の境遇と都合がいゝから、思ひ切つてあゝ書いたに過ぎません。」

「いえ、それはさうかも知れませんが、私のやうに想像されても、併し仕方がないぢやありませんか。貴方は前にも、まだ正式に何も定りもしないのに、お兄さんと私たちを逢はせて、そして何とかして因縁を付けようとなすつたぢやありませんか。——いえ、あの時の貴方の心持は、何とか理解はありませうけれど、矢つ張りさう云はれても仕方がありませんよ。」

「それやア、さう迄仰しやるなら、僕は何とも申上げられませんが、たゞ自分としては、そんな深い下心が在つてやつたのでない積りですが、それがさういふ風に見做されて、お氣に障つたとしますと、僕はたゞ自分の考へが至らなかつたことを、お詫びするばかりです。」

小野は危ふく湧きかゝつた熱涙と、何ともいへぬ口惜しさを堪へて、さう頭を下げる外なかつた。「それやア私だつて何も、貴方がそんなお考へばかりで、あんな小説をお書きになつたとは、思つて

はをりませんよ。併し貴方があんなことをなすつて下すつちやア、他人からさう云はれたつて、返す言葉もないぢやありませんか。何故貴方は一體、そんなことをなすつて下すつたんです。何故あんな小説を書いて、私たちのことを世間に發表して、迷惑をかけたたりなさるんです。」

夫人も自分の言葉に感動して、自ら涙を含んだ聲を出した。さう云はれては小野も、全く答ふる術がなかつた。

夫人は又聲を勵まして續けた。

「一體貴方は何故、私の云ふ通りに、下らない小説なんぞを書くのを、おやめにならないんです。前から私が呉々も云つてるぢやありませんか。生活費位は何とかして補助して上げますから、今から下らない小説なんぞ、決して書かないやうになさいつて。それなのに貴方は昔かないで、たうとうあんなことまで書いてしまつて。——一體それからして貴方は間違つてゐるんです。」

「併し奥さん。」小野はやうやく顔を上げて云つた。「僕は矢つ張り小説が書きたかつたのです。それやア奥さんが、生活を幾らか保証して下さるから、下らないものを書くなつて云つて下すつた心持は有難く思つてゐるんですけれど、僕は矢つ張り何ぞか書かないと淋しくて、書かすにはゐられなかつたんです。」

「そんなら書くにしても、何故もつと立派なものを書かないんです。あんな下らない小説を發表しちやア、第一私たちが先輩に對しても、顔向けができないぢやアありませんか。貴方が九月號に出したもののなんなか、何處でも評判が悪いぢやありませんか。米田さんなんぞだつて、一言もあれに就いて批評さへしないぢやありませんか。」

さうまで云はれては、小野も更に黙つてはゐられなかつた。

「併し僕は、僕の今の力だけのものを、書いて發表してゐる積りです。そして今は奥さんのおつちやる通り、下らないものばかり書いてをりますが、僕は書きながら自分を成長させゆく積りです。米田さんの月評などは、寧ろ奥さんが念頭に置く方がかしい位です。」

さう反噓されると、夫人は更に別な方面から、またかう小野を遣り込めずにはゐられないらしかつた。

「それはさうかもしれません。が、書く物の方は別としても、この頃の貴方の爲さる色々なことは成つてゐないぢやありませんか。あの冬子にお寄越しになつた、皮肉交りの手紙は何です。また假りにもお友達で、貴方に一番盡してゐる杉浦さんに對する、あの下らない嫉妬は何です。」

小野はそれには頭を垂れて、咳くやうにかう云つた。

「併しあのときは、あゝ云はずにはゐられなかつたのです。僕も餘りに輕率なことをしたと、今では悔いてゐます。」

夫人は猶もつけ加へた。

「ほんとに杉浦さんの人格に對して、恥かしいとお思ひなさい。」

「……………」

さう逆言はれても、そのとき小野には返す言葉もなかつた。

夫人は暫く沈黙した後、更にまた結論するやうに云つた。

「とに角、これもみんな貴方を思ふから、私はこんな云ひたくもないことを云ふんですよ。だから貴方もよく氣を付けて、自分のしたことをお考へなさい。そして是からは人に後指さされないやうに立派な行動をしてください。貴方がまたあんな風なことばかりなさると、私たちは考へ直さなくてはな

りませんからね。」

小野もその言葉に、幾らか坐り直すやうにして、何となく溢れくる熱涙を抑へながら、かう云つた。「解りました。以後は決してそんなことはいたしません。そして私のことに就いてはよく考へてみます。」

「ほんとはさうなすつて下さい。それから是非はくれぐれも申上げておきますがね。今日私は何も貴方と冬子のお話を断りに来たんぢやないんですよ。たゞ御忠告に上つたんですからね。ほんとはよく、貴方が立派にさへなつてくだされば、決して私たちの考へは變らないんですからね。ようござんすか。」

夫人の眼にも、さすがに涙が光つてゐた。

「有難うございます。」

小野ももう頬に傳はる涙を感じながら、さう云つて首を下げるほかはなかつた。

やがて、夫人は歸つて行つた。小野はその後姿を見送つて了ふと、口惜しさとも悲しさともつかぬ熱涙が、滂沱と頬を濡らし落つるのを、どうともすることができなかつた。

夕闇はもう部屋の中に忍び込んでゐた。

五

それから三日間、小野は自分の部屋に閉籠つて、そして考へ續けた。考へれば考へる程、凡ての事態が絶望的に思はれた。夫人は最後に、あゝは云つてくれたものゝ、その態度といひ物云ひといひ、凡ては小野にとつて、もう不利に陥つてゐることを、彼は胸に感ぜずにはゐられなかつた。夫人はあ

あは云ふものゝ、よく考へるといふのは、自分の方からは云ひ出し悪いから、そつちで考へて處置すると、さう云つてゐるやうに思はれた。少くとも事既に此處に及んでは、どうしても小野の方から、進退伺を出さなくてはならぬのを、彼は思はずにはゐられなかつた。

彼は勝負家に對して、茲で自分の方から、進んで縁談を辭退するのが、本當のとるべき道かとも思つた。が、併し、それは彼が冬子嬢に對して、まだそれだけ愛と未練がある限り、到底できないのを感した。

けれども、この際少くとも向うに對して、此方から少くとも向うの選擇に任せることを、提議するだけはできると思つた。さうすれば、向うに少しでも眞の愛があるならば、この位の過失はほんの一時の問題として、すぐに許してくれるに違ひない。もしこの位のこと、到底許されないとすれば、そのときは此方から幾ら思つたとて、それは寧ろ詮ないことに違ひなかつた。

「さうだ。さうしよう。向うの考へに凡てを任せよう。かうなつてはさうするより厚か道はない。」
さう小野は決心した。その上彼は、向うの心一つに任せるやう決心したのは、一縷の希望があつたからだつた。彼はまだその時分まで、飽くまで冬子嬢の心が、さう自分を離れてゐるとは思はなかつた。といふのは彼はその一週間ばかり前、彼女と離室の方で會つたとき、彼は思ひ餘つてこんなことを訊ねたことがあつた。

「冬子さん。僕はこの頃奥さんの御機嫌を、大變損じてゐるんですがねえ。もしこんなことが度重なつて、僕が奥さんと喧嘩でもするやうになつた場合、貴方はどつちへついてくれますか。」
彼女はどつちと考へ込んで答へなかつた。

「そしたら僕についてくれますか。お母さんをすてゝも、僕について来てくれるだけの決心があまり

ですか。——僕は冗談で云つてるんぢやありませんよ。ほんとにそんな問題は、考へておかなかちやならないことだから、貴女に訊いてゐるんです。——僕について来てくださいますか。」

「それやアさうなれば、仕方がありませんわ。」

「僕の方へ来てくださるんですね。」

小野がかう念をおすと、彼女は確かに點頭いたのだつた。

それが一週間ほど前のことだつた。だから小野は事態が餘程悪くいつても、冬子嬢だけは少くとも一應、自分を許容しようとしてくれるに違ひない、そんな反對な望みさへ抱いてゐた。そしてそんな問答が彼女の心を脅かして、却つて小野から去らしめたことは、少しも知らなかつたのだつた。

小野はさう決心をきめると、思ひきつて馨子夫人に、かういふ手紙を書きことにした。

奥様。

この間の御忠告御叱責に就いては、御好意からだとは肝銘してをりましたも、餘り激しいお言葉なので、一時は恨みにも存じました。けれども、全く考へてみますれば、私の卑小な行爲から出たこと故、その行爲があの場合不可抗力な衝動からとはいへ、自分に出で、自分に復ることだと思ひました。

私の前途に就いては、私の行き方で勉強するよりほかありませんから、或ひは「學者的になれ」とおつしやる奥さんの期待には背くかもしれせん。けれども文學者が皆が皆學者でなければならぬ譯もないでせうから、その中には僕の素質と僕の方針を解つてくださる機会もあるに違ひないと

信じてをります。そしていふまでも申し上げて置かなくてはならぬ。私としては世に世に安んずる信じてをります。そしていふまでも申し上げて置かなくてはならぬ。私としては世に世に安んずる

かかないのですから、強ひて無理な御期待を待つて置くことは出来ません。私としては世に世に安んずる

それ以外に、お答めになつた私の野人の無作法や、またはあの小説で御迷惑をかけた野人などは、たゞ寛大なるお心で許してくださいさるやう、お詫言するほかありません。

それから、最後に一つと根本的な問題は、あれから三日間考へてみました。そしてその結果は、凡てを改めて奥さんと冬子さんとの御意志に任せるといふ、決心をするに立至りました。どうぞこの際奥さんに於いても、また御當人の冬子様に於いても、改めて御熱考くだすつて、私の一身をお思ひ通りに御決定くださるやう願ひ上げます。そして私を今迄通り遇して下されば、幸福これに越したことはございませんが、さうでなくとも運命だと思つて諦めます。少くとも諦めようと努力します。呉々も御熱考の上、御決定くださるやう願ひ上げます。

勝見馨子様

小野辰夫

かうして小野は、思ひきつてそれを投函した。投函して了つてから、彼は鳥渡、何となく取り返しのつかぬことをした。と、ふと思ひもしたが、併しまた仕方がないと思ひ直した。

それから小野は、更に不安と焦念に満ちた一二日を過ぎねばならなかつた。

三日目に、彼はたうとう思ひきつて、勝見家を訪問しようと思ひ切つた。かうして不安の中に、向うからの返事待つてゐるより、いつそ思ひ切つて、向うの返事に打突かつた方が、寧ろ氣が楽になると思つたからだつた。

もう日は暮れてゐた。小野は電車を下りて、いつも通り馴れた榎町を歩いて行くとき、彼の足は何となく戦へるやうだつた。

玄關の戸をがらりと開けて、いつもの通り訪うたが、冬子嬢は出て来なかつた。彼はいつもなら殆ど案内も待たずに、茶の間の方へ通るのだつたが、何となく今日はそれができなかつた。

「奥さんにどうぞ、僕が来たと申上げてください。」

彼はその儘書齋の方へ通つた。

夫人はなかく出て来なかつた。小野はかうしてゐる間に、ひよつとすると冬子嬢が現はれて、再び自分たちの關係が、元どほりであることを告げ知らせられるか、杉浦でも出て来て、何とか安心させてくれはしまいかと、ひそかに心待ちに待つてゐたが、そんな氣振りは少しもなかつた。茶の間の方にも、冬子嬢はゐないらしかつた。

暫くして、向うの襖の出入口の方から、夫人が静かに現はれた。夫人は何だか妙に顔中を硬ばらせて、いつもより更にむつと黙つて入つて来た。

「お待ちせしました。」

夫人は座についてから、静かな聲でさう云つた。それから、ちらと小野の方を見返して、「お手紙は確かに拜見しました。」

と、同じ調子で静かに云つた。

それで小野は、もう殆ど凡てを了解した。彼は殆ど機械的に、「はア。」

と促すやうに云ふほかなかつた。

けれども夫人は、すぐには續けて云ひ出さなかつた。

「杉浦さん、鳥渡。」

却つて彼女は、何と思つたか、かう云つて杉浦を呼んだ。

「何です。」

杉浦は茶の間の間の方から出て来て、闕の所へ立つた。

「あの、是から小野さんのことで、お話をつけようと思ふんですがねえ。貴方にもゐて貰つた方がい

いから、此方へお入んなさい。」

夫人はかう云つた。杉浦は入つて来て、黙つて夫人の横に坐つた。

夫人は鳥渡小野の方を向き直るやうにして、そして云ひ出した。

「では、小野さんの方から、どつちかにきめてくれとおつしやるから、改めてお話をつけますがねえ。

私どももそれから、いろいろ考へてみました末、改めて小野さんとは、今迄の話は何もなかつたこと

にして頂かうと思ふんです。だから、どうぞその積りでゐてください。」

小野は鳥渡前から豫期してはゐたが、改めてさう宣告されると共に、悲しいといふのでも苦しいといふのでもないが、何だか急に胸の中が、ぐつと窒まるやうに感じた。

「さうですか。ではやつぱり駄目だつたんですね。」

彼は下を向いて、咳くやうに聞返した。

「え、お氣の毒ですが、さう思つて頂きます。——杉浦さんも、どうかさう思つてください。」

小野はまだ何も知らずに、杉浦が何とか一言でも取做すやうなことから、慰めてくれるやうなことでも云つてくれるかと、どつと其方を見やつたけれど、彼はたゞ黙つて點頭いたきりだつた。

暫く一塵は沈黙した、と、小野がまた低い唖れたやうな聲で、もう一度訊き返した。

「で、それは、冬子さんの御意志なんですか。」

「さうです。冬子と相談の結果、さうきめました。」
夫人は静かな聲で云つた。

「さうですか。——」

小野はもう返す言葉もなかつた。

と、夫人は、やゝあつてかう言ひだした。

「で、さういふことに話は決まりましたが、是で何も貴方と、すつかり縁を斷つと云ふんぢやありませんから、どうぞそのお積りで、是からも今迄通り、とき／＼家へ遊びに来て下さい。」

「はア、有難うございます。」

小野は殆ど機械的に、かう云つて頭を下げた。
夫人は續けた。

「それから是はまた、貴方に此方からのお願ひなんですけれど、どうぞ今度の事件は、なるべく貴方も小説になぞ書かないやうにしてください。お互に、いろ／＼迷惑しますからね。」

「は。——」

小野にとつてはこの際、そんなことは問題ではなかつた。彼はたゞ喘ぎ／＼するやうな胸を堪へて猶も夫人の言葉を待つた。

「では兎に角、貴方も勉強して、是からは他人に彼此云はれないやうに、立派な人になつて下さい。今迄のやうぢやない駄目ですよ。私の云ふことはそれだけです。」

夫人は最後に止めを刺すやうにかう云つたが、小野はそれに對して、もう返す言葉も出なかつた。彼は首を垂れてゐたが、やうやく、

「では、失禮します。どうぞ冬子さんには宜しくおつしやつて下さい。」

と、云つて立上つた。杉浦は徹頭徹尾黙つてゐたが、小野が立上ると、

「ぢや失敬。」と、初めて云つた。

小野は殆ど夢中で、勝負家の支關を出た。

冬子の背の口の風は、もう音を立てゝ寒く吹いてゐた。彼はその暗い、人通りの少い戶外へ出て、暫くはどつちへといふ當もなく、走るやうに歩いて行つた。……